

筆山

土佐中・高等学校同窓会関東支部会報
第77号 / 2026年2月

編集人 / 中平 公美子 (59回)
発行人 / 関東支部幹事長 町田憲昭 (67回)
差出人
〒100-8124
東京都千代田区大手町1-1-2 大手町タワー
西村あさひ法律事務所・外国法共同事業 町田憲昭気付
<http://www.tosako-kanto.org/>



2025年の関東支部総会を振り返って

昨年の関東支部総会の準備は、2月15日(土)の学年幹事会前の総会準備会から始まりました。4の会作の引継ぎ資料が充実していたので、前年の準備作業のスケジュールに従って進めていけば、なんとかなるなどの感触を持ちました。この場で炭元宗一郎さん(85回)から講演者に、宇宙分野で活躍している浅川純さん(85回)を呼んではいかがかと提案がありました。

10年前の45回生の先輩の先例を思い出し、キックオフは中華料理店で開きました。講演会担当の炭元さんより、浅川さんの確定を受けて、追加の講演者として高知県へのスペースポートの誘致をリードしている古谷文平さん(78回)、小松聖児さん(78回)を呼んではいかがかと申し入れがあり、3月半ばに2名の講演者を確定できたことが大きかったと思います。講演者の確定を受けて、総会のキャッチコピーも「飛翔」に決定しました。今年の元旦の高知新聞の一面トップは「高知から飛べ宇宙へ 県都近郊にポート構想」で、古谷さん、小松さんが設立した「スペースポート高知」に期待する記事でしたので、高知から古谷さんをお招きしたことは、高知とのつながりを再認識する一助になったのではないかと思います。

懇親会は、有安史晶さん(65回)と野島孝浩さん(65回)が「飛翔」ソングを中心に構成を組み立て、高知の全種類の宇宙酒や田口祥子さん(55回)発案の「あんぱん」も提供しました。

総会の準備作業の進化も感じました。引継ぎ資料の充実、案内状に掲載した「飛翔」のイメージ画像へのAIの活用など。案内状のデザインを作成してくれた酒井俊彦さん(58回)からは、「飛翔」のイメージにマッチしたデザインを引き出すキーワードの選定に試行錯誤したと聞いています。小松正道さん(65回)が準備にあたった総会後の慰労会も有意義でした。演田一志校長をはじめとした先生方、講演者、来賓の皆さまとじっくり話をすることができました。また、総会当日誰より働かれたカメラマンの門脇光明さん(45回)には感謝しかありません。

関東支部だより

■総会懇親会開催 6月7日(土)

プレスセンタービル10階ホールにて、関東支部同窓会が開催されました。テーマは【飛翔】土佐から宇宙へ。恩師や同級生との再開と世代を超えた新しい出会いを喜び合いました。門田道也支部長(52回)から、「同窓会の役割の一つとして、同窓生に寄り添って支えていくという側を提供するというのが一つの同窓会の役割ではないかなと考えております。同窓会は基本は同級生の横のつながり、そして先輩後輩の縦のつながり、この2つのつながりが核になります。このつながりを十分意識をして、今日の懇親会でつながりを深めていただきたい」とのお話がありました。記念講演は、

■活動報告他

町田憲昭(67回)幹事長から、関東支部状況報告がありました。また、同窓会本部や他支部に出向いての幹事の交流が活発に行われているとお話がありました。各イベントについては、担当者から報告がありました。(活動報告のページP14～19にて)

■その他の活動

学生の留学支援【池田38基金】に3名応募があり、有意義な留学であったようです(留学体験記P8～13にて)。

【甲子園で校歌・応援歌を歌う会】の活動に賛同くださる方は、各イベントで募集しています。

■今年度総会懇親会は 6月13日(土)

CONTENTS

第77号(令和8年2月発行)

- 01 関東支部総会を振り返って
島村政典さん(55回)
- 02 関東支部だより
総会懇親会開催について
活動報告他
- 03 総会・懇親会写真集
- 06 講演会内容とメッセージ
講演 浅川 純さん(85回)
古谷文平さん(78回)
- 08 留学体験記 清岡さくらさん(98回)
- 10 留学体験記 中村寛介さん(94回)
- 12 留学体験記 有光茉里奈さん(95回)
- 14 はちきん会
講演 宮村円絵さん(76回)
網野日奈子さん(100回)
- 16 筆山会新年会
新会長 片岡方和さん(40回)
初参加 服部 弘さん(49回)
- 18 ハイクの会
乗鞍岳登頂と乳白色の天然温泉
濱田継夫さん(37回)
- 20 新連載 向陽の空ノムコウ(1)
須藤 靖さん(52回)
【我らが愛する高知県の未来を
若者に託す】

最新刊 宇宙する人生
-東京大学最終講義- を
出版レーダーで紹介しています

- 21 江戸百景 26【絵師廣重の江戸】
西岡恒憲さん(41回)
- 22 都会で子育て【マチルダ】
佐藤彩記子さん(81回)
- 23 ま★いっか
大崎早恵さん(90回)
- 24 出版レーダー
遠藤瑞枝さん(67回)

関東支部年会費(大学生免除) のお振り込み方法について

同封の振込用紙でお振り込みの場合
郵貯から(振込料負担無・赤色払込用紙)
郵貯ATMからのお振り込みの場合
記号 00170-9 番号 142816
名義は土佐中・高同窓会関東支部事務局です

ATMやネットバンキングから(振込料負担有)
インターネットバンキング
または他銀行ATM振込の場合
ゆうちょ銀行 支店〇一九(ゼロイチキュー)店
預金種目 当座 口座番号 142816
名義は土佐中・高同窓会関東支部事務局です
振込人名の前に回生とホームをご記入ください

引き続き支部活動にご協力をお願いいたします



総会懇親会写真集
プレスセンター6月7日





新卒の
100回生の皆様
ようこそ
関東支部へ





久しぶりの黒鉄ヒロシさんのご出席に周りには41回生をはじめ、いつもたくさんの方が集まって写真を撮っていました



回生末尾5の皆さん 受付・写真・運営と楽しい企画をありがとうございました 2026年は6の回の担当です

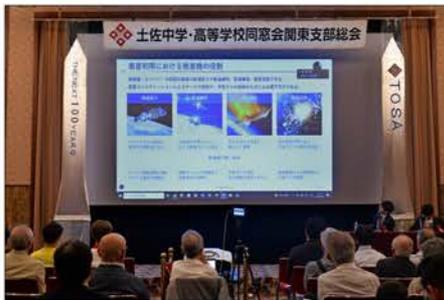
浅川さん講演内容(AIまとめ)

人工衛星用の 「水」推進機



Pale Blue (パールブルー)は、人工衛星用の「水推進機(ウォータースラスタ)」を開発・提供する宇宙ベンチャーである。推進機とは人工衛星を宇宙空間で自在に動かすための装置であり、軌道修正や寿命管理、衝突回避や宇宙ゴミの低減に欠かせない存在だ。従来は火薬や高価なガスを使う方式が主流だったが、当社は「水」を燃料とする推進機を事業の中心に据えている。水は安全で取り扱いやすく、安価で入手しやすいという特長があり、小型衛星の普及が進む時代に最適な推進方式である。

この技術の研究は創業メンバーが東京大学で行ったもので、月探査ミッション「EQUULEUS」に搭載され実証に成功している。研究成果を社会へ還元し、世界の宇宙産業で使える形にするため、2020年にPale Blueを創業した。社名はNASAの探査機が撮影した「Pale Blue Dot」に由来し、地球と水を象徴している。当初はわずか4名でスタートしたが、現在は約50名体制へと成長。千葉県柏市を拠点に開発・製造を行っている。



Pale Blueの事業モデルは、人工衛星メーカーや運用企業に推進機を提供するBtoB型である。製品は用途に合わせて複数ラインナップを展開しており、手のひらサイズの超小型衛星から数百キログラム級まで対応可能だ。特に「水推進機」は小型衛星市場の需要にマッチし、国内外から引き合いが急増している。創業以来、海外市場を重視しており、欧米やアジアの展示会・学会に積極的に参加。既に顧客の多くは国外企業であり、日本発の技術を世界へ輸出する形でビジネスを広げている。

実績も着実に積み上げている。2023年にはソニー製の小型衛星に当社の推進機が搭載され、宇宙空間での稼働に成功。国内の新興ベンチャーや欧州の企業プロジェクトでも採用が進み、複数の宇宙実証が計画中である。研究開発段階から実利用フェーズへ移行しつつあり、信頼性を示すことでさらなる受注拡大につなげている。今後の課題は「量産化」である。従来の宇宙産業は一品生産が中心であったが、近年は数百~数千基規模で人工衛星を打ち上げる時代になりつつある。そのため当社では筑波に新工場を設立し、大量生産体制を構築する計画を進めている。これにより、世界市場で求められる供給能力を確保し、シェア拡大を狙う。

宇宙ビジネス市場は急速に成長しており、衛星インフラの整備だけでなく、輸送、探査、データ利用、通信、観測、さらには宇宙旅行まで広がりを見せている。日本政府も1兆円規模の宇宙戦略基金を立ち上げ、スタートアップや大学研究を支援している。そうした追い風の中で、Pale Blueは水推進機を核とした事業を拡大し、持続可能な宇宙利用を支える存在となることを目指している。

当社のビジョンは、単に推進機を販売することではない。宇宙産業全体のインフラを支える基盤技術を提供し、その利益を再び研究や人材育成に投じることで、未来の宇宙開発をさらに加速させることだ。安全で環境に優しい「水」というリソースを活用し、人類が宇宙をより身近に利用できる世界をつくる。それが私たちPale Blueの使命であり、今後も世界市場を舞台に挑戦を続けていく。(2025年6月7日)

記念講演 浅川純(85回) 古谷文平(78回)

100回生が同窓生に加わる節目の年。5の会では、「飛翔」という同窓会テーマに合わせて次の100年に向けた未来を連想させ、発展が見込まれる宇宙産業に携わる方を呼ぼうと決まりました。小型衛星向けに水を使ったエンジンを開発する株式会社Pale Blueを起業している同期の浅川純君に、真っ先に連絡を取り、講演の快諾を得た。時を同じくして、古谷文平さんという方が高知で「スペースポート構想」を立ち上げたというニュースが流れてきた。浅川君に相談したところ、なんと数日前に会ったばかりという(素晴らしい土佐のネットワーク!)。では、ぜひ古谷さんにも登壇いただきたいとお願ひし、トントン拍子に講演者2人が決まりました。

宇宙産業の発展に寄与すべく、世界を相手にエンジン開発に取り組み浅川君と、地元高知にスペースポートを作り、地元産業を活性化しようと奮闘する古谷文平さん。切り口は違えども、宇宙をテーマに新しい未来を切り拓こうという二人のリアルな挑戦ストーリーには、参加者一同大きなエネルギーをもらい、刺激的な記念講演となりました。

炭元宗一郎(85回)



講演会後に寄せられた たくさんの感想と 応援メッセージを 抜粋してご紹介します

あなたにとって宇宙とは、何ですか？
夢のまた夢。眺めるもの空想するもの/
「あこがれ」/社会課題解決のための
“手段”。ロマン、冒険、新時代/宇宙と
は最強のエンタメ/宇宙とは夢、未来、
フロンティア/無限の可能性、使い方を
秘めた空間/様々な可能性がひろがっ
ている分野/宇宙には死ぬまでに行き
たい!/可能性を広げてくれる壮大なも
の/宇宙は無限の可能性が広がるトコ
ロ/「未知で神秘的なモノ」宇宙は可
能性と挑戦の宝庫!

応援メッセージをお願いします

スイングを大きく実現に向けてご活躍
を祈る/業務を行う上の資金調達、財
務的にどうなっているのか知りたい/
今後は興味を持って宇宙の話題に触
れることが出来ます/スピード感ある生
き方に刺激を受けた/大きな夢と熱い
情熱の実現を!/宇宙が具体的に近づ
いた!/気宇壮大な構想で感動/挑戦・
飛翔し続けて!/人生は一回きり、ぜび
やり遂げて下さい/遠く関係ない宇宙
の話が、身近に考えられた/どのよう
に貢献支援できるかを考えたい/高知の
可能性を感じた。微力ながらお力添え
できれば!/宇宙は土佐の山間より出
づ!/土佐の制服の白線は敷かれたレ
ールではなく覚悟のラインです/将来の
四国・高知を考える夢のある話が本
当に重要/水推進器を載せた人工衛
星が高知から飛び立つことを想像し、
未来が楽しみに/高知県の活性化へ
の努力、応援します/夢がある。ロマン
もある/スピード感がすごい/2029年
の第1回打ち上げ楽しみ!絶対見に行
く!

皆さんのメッセージを書き起こしてい
て、二人のビジョンを現実に変えて行く
力のエネルギーを感じました。グロー
バルとローカル、インフラと衛星、戦っ
ているフィールドは違いますが、熱い想いは
繋がっていくのだと思います。私も自
分のフィールドで頑張ります!

炭元宗一郎 (85回)

古谷さん講演内容(AIまとめ)

スペースポート高知 の挑戦



高知県でスペースポート(宇宙港)を実現する構想は、地域の人口減少問題への危機感から始まった。県の人口はすでに65万人を割り、2050年には約45万人まで減少すると予測されている。従来の対策だけでは持続性に限界があると考え、大きな変革のテーマとして宇宙産業を選んだ。発端はSNSでの妄想だったが、人工衛星の開発に携わっているサッカー部で苦楽を共にした同級生の小松聖児君から共感が広がり、実際の取り組みへと発展した。

宇宙産業は今後も急成長が見込まれており、2040年には市場規模が150兆円に達すると予測される。特に人工衛星の打ち上げ需要は年々増加している。しかし日本は宇宙輸送に課題を抱えている。人工衛星を作る技術はあるものの、打ち上げは海外依存が続き、自国の商業衛星を自国で打ち上げられていない。こうした課題を解決するためにも、国内でのスペースポート整備は重要だ。

高知県はスペースポートの立地条件に恵まれている。赤道に比較的近く、南側が海に開けており、ロケット打ち上げに適した環境を持つ。さらに陸・海・空の交通インフラがコンパクトに整備され、大型船の着岸や空港の利用も可能。加えて30万人規模の高知市が近接しており、観光や滞在環境の面でも大きな強みとなる。打ち上げを観光資源として活用できる点も魅力であり、地域振興との相乗効果が期待できる。

構想のビジョンは「アジア最大の宇宙玄関口を高知に」である。最初は垂直型ロケットの打ち上げから始め、将来的にはスペースプレーンによる輸送にも対応することを目指している。ただ単にロケットを打ち上げる場をつくるのではなく、組み立て施設やエンジン試験場、商業施設などを併設し、人と企業が集う「宇宙産業の拠点」として地域を変革することを狙う。

実際の活動も進展している。2024年7月に株式会社ブンチゲートを設立し、翌年2月には一般社団法人スペースポート高知を立ち上げた。設立イベントには約200名が参加し、業界の専門家も注目している。県議会でも取り上げられ、知事から前向きな答弁を得るなど、行政との連携も進み始めた。現在は技術・事業の両ワーキンググループを組織し、候補地選定や事業性検討を行っている。

法人会員は21社、個人会員は22名に達し、その中には宇宙産業の経験者も多数含まれる。高知大学や高専といった教育機関も参加し、産学官連携による広がりを見せている。また、一般向けにも理解を深めてもらうため、スペースポート模型やCGパースを制作し、イメージ共有を進めている。クラウドファンディングにも挑戦し、地域と全国から支援を集めている。

今後の計画として、2025年度に県への政策提言を目指し、2029年度には小型ロケットの打ち上げを実現することを掲げている。ロケットそのものは自社で開発せず、誘致によって対応する方針だ。スペースポートを核に産業のバリューチェーンを高知に築き、雇用創出や観光振興を通じて人口減少に立ち向かう。

スペースポート高知は、人口減少で先行き不安が語られる地域に「未来を見上げる話題」を提供しつつ、日本の宇宙輸送力強化にも貢献する挑戦である。高知からアジア最大級の宇宙拠点をつくるという壮大なビジョンは、今や多くの人と企業を巻き込み、現実の計画へと歩みを進めている。(2025年6月7日)



留学体験記

スペイン語学留学

海外一人暮らし

清岡さくら(98回)



語学学校のクラスメイトと

私は、大学2年修了時の春季休業中である2025年3月1日から29日までの約一ヶ月間、スペインのバルセロナに留学に行ってきました。この一ヶ月間の活動内容やその感想、留学したことの意味等をここに報告させていただきます。

【現地での活動内容】

平日の午前中は、語学学校のcomexのバルセロナ校でスペイン語を学びました。学校では各国からの留学生と一緒に110分の授業を毎日2講ずつ受けました。私はB1(中級)クラスに振り分けられ、前半は主に会話、後半は主に文法を、すべてスペイン語で勉強しました。クラスメイトには優秀な人が多く、特に授業が始まって最初の週は彼らの語学力に圧倒され落ち込みましたが、その悔しさをばねに放課後の自習に力を入れた結果、より語学力を伸ばすことができたように感じます。また、授業では主な授業内容の他にもスペイン語で雑談をすることが頻繁にあり、それを通して海外の学生が日本

の学生以上に自国や他国の歴史や政治に興味を持つことに気付かされ、自分の無知を恥ずかしく感じました。しかし、そのような危機感を覚えることができたため、帰国後は以前より国内外のニュースを気にかけるよう



ホームステイ先での夕食

になりました。

スペイン人は日本人と異なり三食の中で最も昼食を重視しており、パエリアなど手の込んだ料理を家族や同僚、友人と談笑しながら時間をかけてランチタイムを楽しむのが一般的であるため、私たちもそれに倣いました。また、カフェ等で簡単に昼食を済ませ、

授業の予復習やスペイン語単語の勉強に時間を割くこともしばしばありました。習得したばかりの文法事項や単語を翌日の語学学校で披露して補足説明を受けるということを繰り返し、効率よく学べていたように思います。

【週末の過ごし方】

週末は遠方まで出かけることが多かったです。第1週末にはロンドンに行き、現在ロンドン留学中の友人に会いました。第3週末はスペインの首都マドリードに行きました。バルセロナからは20MのT11と呼ばれる新幹線のような乗り物に乗れば2時間半ほどでマドリードの中心部に着くことができます。バルセロナとマドリード間の沿線の風景が日本には無いもので、印象に残りました。日本の田舎というと、何も無いといっても山、田、川、民家など大抵は何かがあるものですが、スペインの田舎には野原にたまに木が生えている程度で、野原が延々と続いていくような違和感があり、衝撃を受けました。



サグラダファミリア(上)



・カサミラ(下)



土佐校で6年間お世話になった島内麻千子先生がご友人方を紹介してくださったおかげで、マドリッドでは多くのスペイン人と知り合うことができ、充実した週末になりました。マドリッドでは2日間にわたって島内先生のご友人のお家に泊めていただき、土曜日には彼女の甥（高校生）やそのご友人方にマドリッド市内の案内をしていただきました。高校生たちとの会話には主に英語を用いたのですが、*yo*を*ju*と発音したり、*oro*をカルと発音したり、単語の頭にくるRを巻舌で発音するといったスペイン人特有の訛りが見られ、大変興味深かったです。日本語とスペイン語は5つの母音や抑揚など発音の観点からは極めて似ていると言えるのですが、英語を話す際の訛りにはそれぞれのくせがあるようでした。

【週末の過ごし方】
スペイン留学をしたことで、海外で一人暮らしをするという貴重な体験も出来ました。言語も生活習慣も何ん自由ない東京での一人暮らしとは異なり、苦労することも少なくありませんでした。

たとえば通学にはバスを用いていたの

ですが、日本と違って発着時刻が時刻表通りにいかないことが多く、時刻表より早く出発することも頻繁にあったため、乗り遅れて授業に遅刻してしまいうことが何度かありました。しかし、スペイン人には時間にルーズな人が多いことが不幸中の幸いでした。授業開始時刻から数分遅れて学校に到着し大急ぎで教室に飛びこんでも、まだ先生すら来ていなかったことがあり、印象的でした。

また、ローカルなスーパーマーケットでボデイソープと買って購入し一週間半ほど用いていたものが、実は保湿クリームだったということもありました。ボデイソープを意味するスペイン語“*gel de oro*”は、二度と忘れることはありません。初めのうちはそのように失敗も少なくありませんでしたが、帰るころには語学力だけでなく現地の生活に完全に慣れて快適な生活を送れるようになっていました。この経験は、日本以外でも一人で暮らしていけるのだという自信や将来の可能性に繋がりました。

【最後に】

私にとって海外留学は中学生のときから掲げ続けてきた夢の一つでしたが、コロナウイルスのパンデミックや受験勉強もあって今まで機会に恵まれませんでした。それがようやく現実となった喜びを、いまだに噛み締めております。

私にとって38池田基金の意義は大変大きなものでした。私のように留学を考えている卒業生にとって、彼らの背中を押す38池田基金は素晴らしい制度です。改めて、このたびの留学に大きなお力添えをくださった38池田勲夫基金とその関係者の皆様に切に感謝申し上げます。この留学を糧に、残りの大学生活もより実りのあるものにし、土佐校のさらなる発展に寄与できるように精進します。

スペインで知り合った人々



学生の皆様へ

詳細は <http://www.tosako-kanto.org/>

あなたも38池田基金を利用して留学経験してみましょ
う
夢や目標のある方はぜひ応募してみませんか

留学体験記

キャリア形成につながる経験に

ITS世界会議参加と短期語学留学

中村寛介(94回)

ITS世界会議に関するご報告

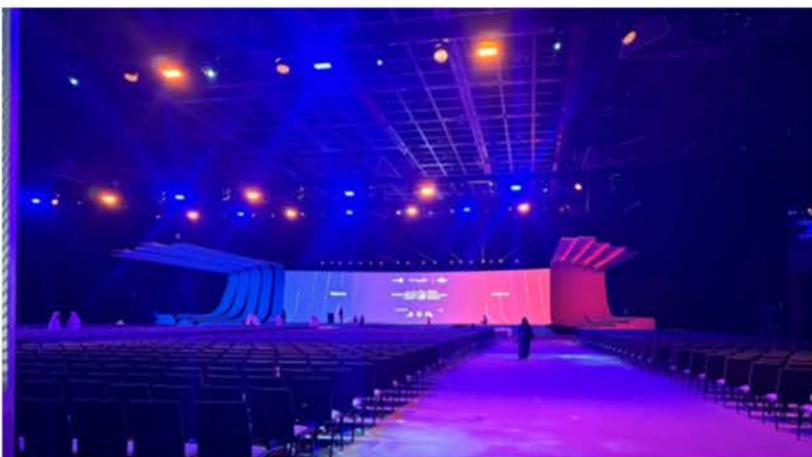
2024年9月にアラブ首長国連邦・ドバイで開催されたITS世界会議(ITS: Intelligent Transportation Systems)に出席いたしました。参加の経緯としては、私が大学院で所属していた研究室の指導教員(教授)およびその関係者が出席される国際会議であり、さらに本会議は年に一度、世界中からITS分野の研究者、製品開発企業、政府機関などが一堂に会する重要な場であったため、ぜひ参加したいと考えました。また当時、私は本田技研工業の自動運転開発部門への配属を希望しており(本稿執筆時点で配属が確定)、今後のキャリア形成にもつながる経験になると期待しておりました。当日は指導教員とともに行動し、私自身が思い描いていたとおり、指導教員の知人の方々や新たに出会った世界各国の参加者と交流することができました。この貴重な人脈を、今後の自動車メーカーでの業務に活かしていきたいと考えています。

会議当日の様子についてですが、ITS分野は非常に多岐にわたるため、一日に20〜30件ものテーマが設定され、それに応じて10前後の会場に分かれて講演が行われていました。各会場では、研究者や機関による研究成果の発表や今後の取り組み方針などが共有され、聴講者との間で活発な議論が交わされていました。中には、今後の条件次第で実用化が期待される技術も多く見受けられ、大変刺激的でした。

また、メインホールには世界各国のITS関連企業のブースが設けられ、各社が最新の技術や製品、取り組みをPRしており、世界に向けてのアピールの場となっていました。自動運転技術や電動化技術など、社会実装が進みつつある分野に関する展示が中心で、初めて目にする技術も多く、大変勉強になりました。さらに、課外イベントとしては、ドバイメトロの運行管理センター、ドバイ国際空港の中央管理室の見学、ドバイ市内での自動運転実証実験の見学など、本会議ならではの貴重なツアーも企画されました。

今回が初めての国際会議参加となり、大変貴重で素晴らしい経験となりました。自動車メーカーにて自動運転開発に携わる私にとって、世界の現状を直接知ることができたことは、今後の業務に大きな意義をもたらすと確信しております。すぐに成果として表れるものではないかもしれませんが、10年、20年という長いスパンで今回の経験を活かしていければと考えています。池田基金の皆様には、本国際会議への参加にあたり多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

また、後輩の皆さんには、ぜひ積極的に国際会議などに参加し、日本や世界の現状を自分の目で確かめていただきたいと思います。その経験は、必ず将来に活かされると信じています。





EC マルタ校

マルタ共和国における語学研修

2025年2月～3月にかけて、マルタ共和国の語学学校「ECマルタ校」にて短期の語学留学を行いました。大学・大学院の間に一度は海外留学を経験したいと考えていましたが、ちょうど交換留学等を検討し始めた頃に新型コロナウイルスの影響が拡大し、海外渡航の機会が大きく制限されました。

2023年以降、徐々に海外渡航が可能になったものの、学部での卒業研究や大学院入試などが重なり、タイミングを逃し続けていました。そのような中、社会人としての生活が間近に迫るにつれ、「今しかない」と決意し、大学院2年の春休みを活用して短期ではありますが留学を実現しました。ECマルタ校を選んだ理由

は、インターネット等の情報から、マルタ共和国が温暖な気候で生活環境も良く、国全体として語学留学に力を入れている点、そして日本人留学生が比較的少ない点に魅力を感じたためです。その結果、短期語学研修として最適な環境であると判断し、この学校を選びました。

ECマルタ校の語学研修は、授業

とアクティビティを通じて英語を学ぶ形式でした。授業は、事前に選択式のクラス分けテストを受け、スコアに応じてクラスが編成されます。各教室では専用のテキストを使用し、英語力の向上を目指します。私のクラスは文法が習得済みであることを前提とした構成で、授業の大半がスピーキングを中心としたディスカッション形式でした。ディスカッションでは、自分の意見を積極的に発信することが求められましたが、「意見はあるが英語が出てこない」という壁に何度も直面しました。他の日本人学生も同じような悩みを抱えており、スピーキング力の重要性を改めて痛感しました。もっと話せれば、より深く議論に参加できたと感じています。

アクティビティについては、毎日学校側が企画しており、参加することで毎回異なる国籍の学生と交流できました。共通の活動を通してすぐに打ち解けられるため、英語に自信がなくても気軽に話すことができ、実践的な会話の練習にもなりました。私は、授業とアクティビティの両方に積極的に参加し、限られた期間の中で最大限英語力向上に努めることができたと考えています。

最後になりますが、池田基金の皆様には、本語学研修への資金支援を賜り、心より感謝申し上げます。新型コロナウイルスの影響で一時は諦めかけていた海外留学でしたが、本基金のご支援が大きな後押しとなりました。短い期間ではありましたが、現地で得た多くの学びと経験は、これからの人生において大きな糧になると確信しています。先輩の皆さんには、少しでも海外に興味がありましたら、ぜひ思い切って一歩を踏み出してほしいと思います。その経験は、きっと将来に生きてくるはずですよ。

留学支援基金
返済不要
短期もOK
詳しくはHPから

38 池田勲夫
土佐中高同窓会関東支部基金

38回生有志による資金拠出により、同窓会関東支部に奨学金制度を新設
同窓会関東支部の若手会員を応援

- ・同窓会関東支部に所属する若手会員を対象
- ・返済不要の給付型奨学金
- ・海外留学などの海外プログラムが対象

選考基準

- ✓ 海外への旺盛な好奇心を有する者
- ✓ 夢や目標のある者
- ✓ 母校や同窓会に対する思いのある者
- ✓ 冠する上氏の名に叶おうとする者

詳細は土佐中・高等学校同窓会関東支部のホームページに掲載
www.tosako-kanto.org

留学体験記

欧州経済研修

旅の様子と感じたギャップ

有光茉里奈 (95回)



ストラスブールの欧州議会にて

95回生の有光茉里奈と申します。今回、土佐高同窓会の38池田基金にご支援頂き、10泊12日の欧州経済研修に参加しました。所属大学の経済学部が主催するもので、内容は、協定校であるマールブルク大学及びストラスブール大学への訪問と、特別講義の受講、学生交流を中心とした、短期留学です。教授2名の引率のもとドイツ・フランスの4都市を巡りました。

【研修参加の経緯と目標】

まず、参加に至った経緯についてお話しします。私は今春より、千葉を拠点とする金融機関に総合職として採用されました。駐在を含む英語業務に携わりたいと考えています。しかしその裏で、非英語圏での学びを深める機会が(転職しない限り)無いという現実が直面しました。企業の海外拠点が英語圏外に無いため、仮に駐在等が叶った場合でも、欧州の非英語圏へ赴く機会はそうありません。このような状況の中、勉強と観光を一度に体験できる貴重な好機を逃す訳にはいかないと感じ、38池田基金に応募しました。もし書類選考に落ちたら、参加を諦めるつもり

でした。しかしこのようなご支援を頂き、大変感謝しています。

今回定めた目標は、「異なる法秩序・経済構造で動く世界に触れ、相対的に日本を理解する感性を育む事」、つまり「異文化体験を通じて規範や常識を疑うこと」でした。実際に、研修中にシヨツキングな出来事にも遭遇しましたが、楽しみながら受け入れることを心がけました。

【現地での活動内容】

研修は、羽田空港からフランクフルト空港へ向かい、マールブルク(4日間)、マインツ&ストラスブール(4日間)、パリ(3日間)を巡りました。以下、各地での活動内容について説明します。マールブルクは、人口約8万人の中規模都市で、観光地としてはまず選ばれ



マールブルクの街並み

ないような田舎町です。丘を切り開いたような街で、道の高低差が激しく、歩く事まるで登山でした。現存最古のプロテスタント系総合大学であるマールブルク大学を中心とした大都市であり、街の雇用のほとんどが学生と大学関係者に支えられています。街全体が一つの村のようであり、アカデミック

な雰囲気でした。私達は、大学だけでなく、旧市街地探索や、森林局の監督のもとでの植林体験、バイオマス発電所見学も行いました。

また、視覚障害者向けのギムナジウム(ニ盲学校)が唯一この街にあり、杖を持って歩く方々をよく見かけました。

ストラスブールでは、大学の他にも欧州議会、アルザスワイン街道、日仏学生会館、パンデピス工場などを訪れました。ストラスブールは、ドイツとフランスが領有権を争った歴史的な場所であり、その名残として独特の文化や雰囲気が見られました。郷土料理に触れる度に、複数のルーツが混ざり合った形跡を感じました。現在のストラスブールには、欧州の主要な国際機関が多数置かれており、人権裁判所、評議会などもありました。



アルザスワイン工房



バイオマス発電所



植林体験



交流会で食べた現地学生イチオシの料理
シュニツェル（薄豚カツ風）は美味しかった

ヴェルサイユ宮殿（右）
ストラスブール大聖堂（左）



パリでは、最終日までの3日間を使ってグループ研修を行いました。私達は、エッフェル塔、シャンゼリゼ通り、凱旋門、オペラ座、ルーブル美術館、マレ地区、ヴェルサイユ宮殿など、王道の観光地を巡りました。その中でもヴェルサイユ宮殿が特に印象的でした。広大な敷地と荘厳な外観から、宮殿内に入りましたが、その規模や建築に圧倒されました。扉や天井が超特大サイズであるにも関わらず、ベッドや椅子のサイズが自分と同じであることに親近感を覚え、王室の人々の生活の息遣いが感じられました。生々しくも思えましたが、映像や歴史番組で見ると、歴史の厚みによりリアルに感じられました。

【感想】

訪れた全ての場所で、実際に足を運んでこそわかる些細な気づきがありました。例えば、同じ国でも場所によって住民の性格や雰囲気は全く異なり、フランス内でもパリ、ストラスブール、アルザスでは全く違う印象を受けました。また個人的に一番驚いた事は、英語の通じない人の多さです。特にパリの小さなスーパーで話しかけた人に、英語の通じる人がほぼおらず驚きました。確かに、マールブルクやストラスブールでも、街中で英語を話せない住民に遭遇する事は数多くありましたが、いずれも接客業に従事する方は、概ね英語で意思疎通ができた印象でした。その上で特段観光客の多いパリだとしても、英語の通じない場面が少なからずある事に驚きました。また、英語圏と比べて、

【最後に】

学生最後の春休みを迎えた私にとって、この研修は何にも代え難い経験でした。事前に、引率の教授が「借金してでも参加するべきだ」と仰っていたのですが、言葉通りでした。キャリア観にもポジティブな影響があったと感じます。またこのような機会が広く開かれている事も大きなチャンスです。特に私は、38池田基金による奨学金制度がなければ、この機会を知りながらも参加を諦めざるを得ませんでした。「海外への旺盛な好奇心を有し、冠する土佐の名に叶おうとする者」を応援せんとする制度理念に強く共感するとともに、後輩にあたる皆さんにもぜひこれを活用して頂きたいと存じます。この文章が皆さんの参考となり、何かの一助になれば幸いです。



凱旋門前で
欧州経済研修の皆と（本人左端）

第24回 はちきん会

2025年10月25日



ミクニマルノウチでの食事の様子(上2枚)
幹事一同ご挨拶(下)

10月25日、森・濱田松本法律事務所
様会議室、およびミクニマルノウチにて
第24回はちきん会が開催されました。
今回ナイトを務めてくださったのは
市川直介さん(53回)。女性41名(学生
2名)、男性13名、計54名の方に参加
していただきました。

様々な世代の女性・男性が一堂に会
する光景は、はちきん会ならではの。多様
な人生のフェーズにいる女性たちが参加
できるというはちきん会の魅力が感じ
られる会となりました。

第二部の食事会も、大い
に盛り上がりました。ミ
クニマルノウチのすてき
な計らいで、ほぼすべて
のメニューに高知県産の
食材が使用されている、
その日限りの特別メニュー
を堪能しました。

乾杯の音頭は、佐々木泰子さん(33回)
が取られました。着席形式の会食だっ
たこともあり、仕事や家庭の話、そして
土佐高時代の思い出まで、テーブルごと



に会話は尽きませんでした。懐かしい味
わいととも、自然と飛び交う土佐弁。
東京の中心で、これほど温かく、華やか
な集まりを開けることのすばらしさを、
改めて感じました。

最後は、全員で土佐高の校歌を歌い、
会は幕を閉じました。世代を超えたつ
ながりと、はちきんたちの心強い絆を感
じながら、それぞれが「今」を生きるた
めのヒントを持ち帰ることのできた一
日だったのではないのでしょうか。

参加者の方々の満足度も非常に高く、
幹事一同、心から嬉しく思っておりま
す。来年度、25回目という節目を迎える
はちきん会。今後も進化しながら、土佐
のはちきんたちを支え続ける場として
ますます発展していくことを願い、本稿
の結びといたします。

網野日奈子(100回)

「世界を知って 自分を知る」

第一部の講演内容について

スピーカーの宮村円絵さん(76回)は、東京大学をご卒業後、日本銀行に入行、海外の数々の重要プロジェクトに携わりながら、結婚・出産という人生の大きな節目も経験され、国際金融の第一線を歩まれてきた方です。現在は、対メディアの業務で、金融政策決定会合の発表に携わっていらっしゃいます。



総裁発表後の為替変動やメディアの動向には一喜一憂されている

宮村さんのこれまでの歩みは、驚きと同時に、深い納得をもたらすものでした。「海外で仕事したい」という強い思いを胸に、情熱をもって仕事に取り組んでこられた生活は、想像をはるかに超える挑戦の日々でした。

コロンビア大学ロースクールへの留学中も、海外生活の誘惑には目も向けず、世界トップレベルの秀才たちに囲まれながら、毎日ほぼ24時間という圧倒的な勉強量でLLMを修了されたエピソードには、会場からどよめきが起こりました。

結婚・出産を経てからのお話は、より一層宮村さんのエネルギーを感じさせるものでした。日銀でも、子育てとキャリアを両立している女性がほとんどおらず、「周囲がどう対応していいかわからず、仕事を思ったようにもらえなかった」という言葉には重みがありました。

しかし、そこで立ち止まらず、「もっと仕事をください」と上司に直談判されたというエピソードに、会場から感嘆の声が上がりました。



海外での仕事を通じて感じた「Diversity」についてのお話も印象的でした。国籍も文化も、それまでのキャリアも異なる人々が強みを持ち寄り、一つの大きな目標に向かうという環境。欧州デジタル通貨の検討メンバーに日本人で唯一選ばれ海外に駐在し、様々

な困難もあったかと思いますが、メンバーから信頼されながら仕事をこなし、「通貨の安定」の面から社会に大きく貢献されてきた姿は、まさにプロフェッショナルです。

特に心に残ったのは、質疑応答の中で語られた言葉です。「女性は、仕事、家族、子育てなど、様々な人生で関わっていかなければいけないものがある。どれを重視し、どのようにバランスを取ってこれたのでしょうか。」との子育て中の女性からの質問に対し、

宮村さんはこう仰いました。「私は、すべて諦めず、すべてを求めて、行動してきました。」学生時代から学び続け、望む仕事を手にし世界を舞台に活躍しながら、結婚・出産を経て家族との時間も大切にしてきた宮村さんの人生は、まさにこの言葉を体現しているように思えました。



自身の描く未来に向かって行動し続ける情熱と行動力、そして地道な努力の積み重ねが、今日の輝かしいキャリアを切り拓いたのだと、改めて強く感じられました。

学生にとっては、大きなロールモデルと出会う機会となり、子育て中の同窓生にとっては、自身の生き方やキャリアについて改めて考えるきっかけとなったことでしょう。

網野日奈子(100回)

お知らせ

はちきん会は、2026年も10月頃に開催予定です。男女年齢に関わらず参加出来ます。講演とリッチな食事を楽しんでいただけます。女性と大学生はかなりお得な会費となっています。参加申し込みについては、総会またはHPでご案内いたします。ご参加お待ちしております



ナイトの市川直介さん(右)にお礼の花束を



講演の後、宮村円絵さん(右)に花束を渡す網野日奈子さん(左)

筆山会新年会 2026年1月10日



筆山会の発展に向けて

片岡方和 (40回)

伝統の継承と新たな挑戦 2024年に刊行された「筆山会50年のあゆみ」を拝読し、改めて本会の持つ歴史の重みを再確認いたしました。1973年に土佐中・高同窓会関東支部の活動を補う形で始まった「筆山会昼食会」は、50年を超える歳月の中で、同窓生が互いの経験や知見を共有し、知らない世界に触れることのできる極めて価値の高い交流の場として親しまれてきました。私は昨年6月、7年半にわたり献身的に尽力された佐々木泰子前会長の後を継ぎ、会長の職を仰せつかりました。前会長の功績に深く敬意を表するとともに、その名に恥じぬよう筆山会の運営に邁進する所存です。

先日の2026年新年会には50名を超える方々にお集まりいただき、世代を超えた活発な交流が行われました。しかし、一方で会員の高齢化と減少という避けて通れない課題も浮き彫りとなりました。

そこで私は、本会の魅力を次世代へ引き継ぐため、以下の3つの目標を掲げます。私は会長を引き受けるにあたり、自分なりに努力すべきことを次のように決めました。

伝統の継続：年間10回程度の昼食会と、一月の新年会を変わらず開催します。夕食会の新設：仕事等の都合で昼食会への参加が困難な方のため、年2〜3回の夕食会を新たに実施します。

会員増への挑戦：活動を通じ、新年会の出席者を毎年10名程度増加させる。

特に、今年から新しく始める夕食会についての大きな考えを述べます。

1、土佐高卒業生が気軽に出席できるような夕食会にする。

会場候補は高知のアンテナショップ「おきやく」

2、会費は3000円ぐらいとし、2時間半ぐらいの夕食会とする。

3、どなたでも最低3分スピーチの権利を持つ。(義務はない)

4、準備のためのボランティアを募る。(無理なお願いは一切しない)

5、おみやげのため現物を含む寄付を募る。(無理なお願いは一切しない)

時間は有限であり、10年という月日も過ぎてみれば一瞬です。その貴重な時間の一部を、ぜひ筆山会での交流に充てていただきたいと願っています。

同窓生との対話から得られる新たな知見は、人生をより豊かにしてくれるはず。皆さんの力で筆山会をより価値ある組織へと高め、誇りを持って後輩たちに引き継いでいきましょう。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

筆山会新年会に初参加しました

二〇二六年一月十日(土)正午から代々木倶楽部で開催された筆山会新年会に初参加しました。筆山会という大先輩方の集まりというイメージを持っていましたが、自分自身いい歳になっているので、もういいかなと参加した次第です。

今回は、永きに亘って筆山会会長をお努めいただいた佐々木泰子さん(三三三回)が顧問に就任されることとなって、新会長片岡方(四〇回)の下での初の新年会でした。新会長の引き継ぎご挨拶の後、門田道也関東支部長(五二回)のご挨拶と乾杯のご発声により歓談がスタート。

参加総数五十三名(同伴者含む)、お酒も入って高知愛・母校愛に溢れた先輩後輩が入り乱れて話が弾みます。

初参加者は私の他、竹中恵美子さん(三二回)、山本英雄さん(三四回)、中平法生さん(五二回)、池田真浩さん(八三回)の五名でした。

会では中島宏さん(三八回)の名司会でどんどん進行します。最年長の森健さん(二三回)にもスピーチをいただき、私も本当に元気を頂戴しました。池田勲夫さん(三八回)と中平公美子さん(五九回)からは昨年発足した「甲子園で校歌・応援歌を歌う会」の加入案内がありましたので私も即加入。

二時間はあっという間に過ぎ、全員で応援歌・校歌を斉唱。丁野真一さん(七三回)によるエールの後、佐々木泰子顧問のご挨拶をもって新年会はめでたくお開きとなりました。

服部 弘(四九回)



第27回 ハイクの会 乗鞍岳 3026m

2025年9月7〜8日



乗鞍岳肩の小屋口避難小屋から山頂を目指す登山組

乗鞍はやはり三千メートル峰

去年の9月初旬、私たちハイクの会は、乗鞍へのバス旅行を行った。四季が二季になってもう秋はなくなりつつあるというくらい日本列島の亜熱帯化進み、9月になっても暑さは続いていた。

初日は松本城と安曇野の山菜畑に立ち寄った。また、真夏の太陽が照りつけるので、できるだけ日陰を歩こうとしたほどだった。二日はいつも通り、二組に分かれて、登山組は乗鞍スカイウェイの途中にある避難小屋から肩の小屋を経由して頂上の剣ヶ峰（三〇二六メートル）へ、散策組は畳平（二七〇二メートル）周辺のお花畑を楽しむ、という予定である。

かなり多くの参加者がこの避難小屋でバスを降り、意気込んで登り始めた。肩の小屋へは約30分、剣ヶ峰へはそこから約1時間



肩の小屋を目指し出発

間のコースタイムである。しかしガレ場の登りであごを出す人が続出し、登山の幹事さんたちを悩ませた。かつての勇者（？）だった三七、三八組もはや予定時間通りには登れないクラスに落ちているからである。多くがなんとか、肩の小屋にたどり着き、幹事さんにケアされながら、畳平に引き上げた。後で述べるが、林田勲君（38回）の川柳がそれを体現している。

のりくらに登らずのり散策路

彼も当初は山頂を目指していたはずである。

帰りのバスでは恒例の俳句と川柳での頭の体操の時間となった。俳句では初参加の坂本海さん（85回）が天をとった。

秋風を足音が舞う 剣ヶ峰

この句にあるように、三千メートル超える乗鞍は温度も急降下、風も烈風となり、下界の暑さを完全に忘れさせ、ヤツケをきても震えがきた。何人が登頂したかは定かでないが、私たちは5人で登頂証拠の写真を撮った。

乗鞍は二〇〇九年にツキノワグマが畳平に出て、人々のいるバスセンターに入って大騒ぎとなり、

一〇人が噛まれて怪我をしたことがある。今回は幸いそのようなことはなかったが、昨今至る所で出没するので、油断はできない。

私の川柳で恐縮だが、

くまも今 街で用事を済ます日々

が天に入った。以前にはなかった話題である。

ハイクの会は、他の学校ではまず考えられない同窓生たちによる親睦行事で、三十人近くが先輩、後輩を交えて共に時間を過ごすことができる。誠に稀有で幸せである。これができるのは土佐高校ならではの、いつも思う。次第に参加者数が減りつつあるのは知っているが、このバス旅行が二七回も続いている学校が果たしてあるだろうか？ 登る登らないに関係なく、参加できるだけでありがたい。

濱田継夫（37回）



乗鞍岳剣ヶ峰にて筆者(左)

俳句と川柳

今回のお題は【秋】。下界はまだまだ真夏だけに旅行中に秋を感じた乗鞍岳での句が多かったようです。全員の俳句・川柳の中から良いものを3句選ぶ投票制で天・地・人を選びました。初参加の坂本海さんが俳句と川柳共に票を集めました。賞品は井上健郎さん作の陶器。バスの中の表彰式は大変盛り上がりしました。(写真は上位3名ずつ)



【川柳】
 天 熊も今町で用事を済ます日々
 地 乗鞍にのらりくらりと酒の旅
 人 早よ来いや言つた今は待つちよれや
 濱田継夫
 坂本海
 池田勲夫



【俳句】
 天 秋風を足音が舞う剣が峰
 地 風の中リンドウ一輪岩のかげ
 人 いただきの霧吹きとばせ野分風
 坂本海
 池田勲夫
 森郁夫



青空と松本城(上)



安曇野市アルプス公園では峠の釜めしを展望台は360度の眺望でアルプスの山々を眺めました



安曇野の大王わさび農場

貸し切りバス利用の一泊二日の旅(全食事つき)です。登山組と散策組に分かれて自然を満喫しますお子様と一緒に。ご夫婦での参加も大歓迎。今年こそ参加してみませんか。



写真(右3枚)は宿泊先の乗鞍高原温泉の青葉荘は源泉かけ流しの宿
 夕食の宴会の様子とその後の部屋飲み。



サロン付きバス(右下)帰路は打ち上げ状態



我らが愛する高知県の未来を若者に託す

私は2024年3月に東京の大学を定年退職し、4月から高知工科大学特任教授として単身赴任しています。1977年3月に高校を卒業して以来、半世紀ぶりの高知暮らしですが、帰ってきたその日から違和感なしに楽しく生活しています。

おそらく関東支部会員の皆さんと同じく、私もある種の刺激を求めて上京しました。小田急新宿駅で始発電車に乗るべく列の先頭に並んでいたにもかかわらず、ドアが開いた瞬間になだれこむ人たちに驚き座ることができなかつたこと。満員の井の頭線で車両の途中で立っていたところ、途中駅で降車できず、渋谷まで行ってしまったこと。上京直後には戸惑ってばかりだった都会で生き抜くための「ルール」にも、やがてすっかり慣れました。ただしそれは、人間らしい生き方を忘れた代償だったのかもかもしれません。

何かを得るためには別の何かを失わざるを得ないとすれば、それらの優先順位の選び方は人それぞれです。私は自分の人生にそれなりに満足していたつもりですが、10年ほど前から、健康なうちに高知に帰り、人間らしい余生を楽しみつつ何か故郷に貢献できないものかと考え始めました。幸い、高知工科大学に5年任期で雇って頂き、すでに2年近くが過ぎました。

帰って来て痛感したのは、人懐っこくておせっかい、かつおしゃべりで開放的な高知県民気質の心地よさです。病院・銀行・郵便局などでの親切な対応、日曜市の露店・居酒屋での初対面の店員さんやお客さんたちとの土佐弁でのやりとりなど、半世紀近くすっかり忘れていたふれあいでした。

私は高校から入学したため知り合いは少なめですが、それでも高知在住、さらには県外から帰省する土佐高の同級生と頻繁に旧交を温めています。土佐高で国語を担当していた正木宏明君の2024年4月の定年祝賀会を皮切りに、ほぼ2ヶ月に一回程度のペースで土佐高関係者と飲み会をやっています。おかげで高知の食べ物がいずれも日本はおろか世界に誇るレベルだと再認識できました。



正木宏明君土佐高定年祝賀会に参加した52回生Nホーム（西峯隆博先生担任）の面々。（2024年4月20日ザクラウンパレス 新阪急高知 マンダリンコート）

また、県庁や高知工科大学でお世話になっている職員の皆さんを始めとして、色々な場所で土佐高出身者が多数活躍されているのにも驚かされました。高知工科大学を設置する高知公立大学法人の伊藤博明理事長も同級生で

す。先日、在京の同級生、山本章雄君に教えてもらった近くの居酒屋で、「安芸虎」を飲み尽くす会に参加したのですが、その直後に届いた土佐校同窓会誌から、その場でお酌をして頂いていた有光社長も先輩だったと知りました。

さて、ここまでノスタルジーまみれの雑談ばかり書いてしまいましたが、高知県の未来は決して楽観できません。私が高校生の頃に80万人を超えていた県の総人口は、すでに65万人を割り込んでいます。2024年の出生数に至っては3108人です。このままではやがて10人に1人が土佐高出身となる計算です！

濱田知事は、ことあるごとに人口減少をくい止める政策への決意を熱心に語られています。高知県元気な未来創造戦略推進委員会の委員を拝命した私も、微力ながら可能なことは何でも協力させて頂きたいと考えています。

なんといっても、高知の未来は、県内の高校・高専・大学で学ぶ若者たちの力にかかっています。高知工科大では、2025年4月より、**高知の高校生に最高の知を**、と銘打った**高知高知講演会**を開始しました。ノーベル物理学賞受賞者である梶田隆章さんに来て頂いた第1回に、土佐高の女子生徒の方が積極的に数多くの質問をしてくれる姿を見て私は圧倒されました。土佐高の若きハチキンの皆さんのパワーを活用できれば、高知の未来は安泰です。



第一回高知高知講演会の終了後、梶田さんを取り囲んだ若きハチキンの皆さん（2025年4月26日、高知工科大学永国寺キャンパス）

高知高知講演会は、2025年7月、12月にも行われ、来年以降年間3回の定期開催を予定しています（**高校生**を主なターゲットとしているものの、**高齢者**の方々も大歓迎ですから皆様はもちろん、高知在住のお知り合いの方々にも、ぜひご参加いただきたいと思います。開催情報は高知工科大学のホームページをご覧ください）。

我々の高知県の消滅を食い止めるには、守るだけでなく攻める姿勢が不可欠です。実現可能性は高くなくとも、ゲームチェンジャーとなりうるアイデアを数多く出し、それらができない理由をあげつらうのではなく、人脈や経験を活かしてどうやれば実現できるか支えるのが、我々年寄りの責任です。関東在住の皆さんに貢献して頂けることはいくらかでもあります。土佐高のみならず、高知県の未来のために是非ともご協力ください。



「家庭の味」の新しい形 — 頼ることで生まれた心のゆとり —



毎日、仕事が終わると同時に始まる「第二回戦」。共働きて小学四年生と未就学児を育てる私にとって、夕暮れ時は「戦場」と呼べるほどの威勢の良いものではなく、ただただ気が重くなる時間でした。やっと業務を終えたのに、すぐに「夕飯」という新たなタスクを短時間でこなさなければいけないプレッシャー。昨日もそうだったし、明日もまたやってくるこのループ。帰りの電車で「買い忘れはないか」とミスにおびえ、スーパーのレジの行列を見て立ちすくむ……。正直、もう戦う気力ががんばる気力も残っておらず、心身ともに削られていました。

そんな余裕のない私を救ってくれたのが、家庭料理の受取サービス「マチルダ」です。

仕組みは至ってシンプル。事前に予約し、仕事帰りに近所の受取場所に立ち寄るだけです。これで献立、買い物、調理、そしてあの億劫な洗い物という工程が劇的に減りました。

家事代行サービスで作り置きを依頼するよりもコストを抑えられ、毎日バリエーション豊かな晩ご飯が楽しめる。予約制で廃棄の罪悪感がないのも、心に心地よい選択です。

何より、料理が美味しいのです。薄味で外食感がなく、家庭の延長にあるような、誰か知り合いのご近所さんがおすそわけしてくれたような優しい味です。アンパンマンではありませんが、「美味しいものを食べると元気が出る」という、忘れていた感覚を思い出させてくれました。

季節の行事メニューが並ぶのも嬉しい。子供たちと「もうすぐ節分だね」と会話が弾み、工夫が凝らされた副菜は、子供が多様な野菜に挑戦する機会も作ってくれました。

親が近くにいない私たちのような核家族は、誰かに頼ってなんぼ。大丈夫、こうして頼ったところで、私たちは十分すぎるほど忙しいのですから(笑)。「手作り」に縛られず、プロの力を借りて生まれたゆとり。

それが今の私にとって、家族の笑顔を守るための新しい「家庭の味」になっています。

「ステーションでの受け取り」
受け取り可能なステーションはどんどん増えています。ステーションについていたら、LINEメニューの「受け取り」をタップ。QRコードをかざすだけ。10秒で受け取り可能です。



UIターンをお手伝いします。

転職・移住

気軽に相談してよ♪

- UIターンしたくなったら
▶▶▶ 私たちにご相談ください。
- UIターン、Iターン希望の方がいたら
▶▶▶ 私たちをご紹介ください。

一般社団法人
高知県UIターンサポートセンター

高知 本部

高知県、市町村、関係団体の43団体を社員とする一般社団法人です。無料職業紹介所として、高知県の企業と就職・転職希望者のマッチングをはじめ、UIターン希望者向け各種イベント、及び移住の際のサポートを行っています。

☎ 088-855-7748 ✉ jinzai@iju-jinzai.kochi.jp

東京窓口

☎ 03-6206-1707

【開設時間】10:00～18:00(平日)

東京都千代田区内幸町1-3-3 内幸町ダイビル8F

高知で働きたい!を応援します。
「高知求人ネット」

高知求人ネット

セカンドキャリアの相談も大歓迎!

WEB

厚生労働大臣許可番号 39-ム-300012

献立の一例と料金

ファミリーセット
大人2人+子ども1人分 ¥2750
(1人あたり ¥917)

ご相談・ご紹介等、よろしくお願いたします。
高知県UIターンサポートセンター

高校生の頃に思い描いていた大人のイメージとは全然違うけど、ま★いっか

あら汁フック

「ときどき『いい魚が入った』とアパートの1階に住んでいる大家さんのお父さん。じじいから吉報が。これは元漁師だったじお手製の『あら汁』が作られる合図。今までいろんなお魚であら汁を作っていたのだが、中でも飛びきりのお気に入りが『鮭のあら汁』。濃厚で旨みがギュッとネ。いつも小鍋か深型タッパーで出来立てを届けてくださるのだが、私が平日の帰宅が遅く、容器の返却がすぐ出来ないこともしばしば。そこで新年明け、部屋の外扉に返却容器の袋を吊り下げるフックがじじいお手製の紐で設置された。

じじいの扉に返却フック。
私の扉にお届けフック。
嬉しッ

ベルばら

大学受験共通テストの世界史の問題にベルばらが出たとネットニュースを見て、大家さんの娘ちゃん(高3)が持って帰ってきた問題冊子を貸してもらった。「キヤールオスカル」と漫画を見ながら、そういえばフランスのベルサイユ宮殿に行ったときの宮殿内を回り終つて出た広大な広場。マップを見ながらどこから行くのかを考えてたら、有料の乗り物を見つけた。これに乗たらどうなるかな?一緒に行つたら女の子と話をしたら、「こんにはは!」か忘れたけどスタップさんが日本語で話しかけてくれた。「えー?」って私は驚いて、その方の胸元には幾つかの国旗バッジ。どうやら喋れる言語のバッジだそう、日本語でこの

バスに乗れば行ける場所を明らかに説明していただいた。その乗り物に乗ったおかげでどこから遠く離れ、車の音が一切聞こえず、ただ鳥の鳴き声や風や水の音だけが存在していた。見たことなかった緑色の鳥も飛んでいて、仲良く芝生に寝転んでいるカッパルがいて、もうほっこり最高だった。もし母が海外旅行したいと言うならここに連れてきたい。

オシ

フランスからの帰りの飛行機はインドを経由して帰ってきた。12時間。一時入国も出来なかったから仕方なく空港内で過ごした。途中で暇にならちゃつて、ベンチに座って行き交う人を観察したら空港職員さんから施設アンケートに答えて欲しいとインタビュー。その人は多分私より若そうな方。質問に答えながらささやかな会話を楽しめた。国際空港職員だけとまだ海外に行ったことないんだ。番行つてみたい国はどこ?みたいな。さて、そろそろ搭乗ゲートの案内出るかなーと思つてデジタル看板見に行くと出ない。私が乗る飛行機より後の時刻に出発する便は沢山表示されているのに、なぜか日本行きは表示されない。何回目かの確認でスタッフさんに直接尋ねたとき、同じ質問をしている人と目が合った。「日本人ですか?」って。「えー?」

とまたしてもキョトン驚きの私。彼はスリランカ出身で日本に留学して日本行きに乗るとのこと。それからの待ち時間はとても楽しかった。妹さんの結婚式でスリランカに帰つてみたみたいで、美しい妹さんの写真やスリランカの街や自然の写真を沢山見せてもらいながら話した。そのとき、新しいあだ名「オシ」を命名してもらった。ワイワイ話をしていたら、男性が近づいてきた。その方はインド出身で日本で研究者をしているとのこと。私の顔を見て、こが日本行きの搭乗待合だと思つたと笑。確かにこんななアウエイ感がある場所は久しぶりかも。それにしても皆さん、日本語上手すぎでしょ!

万博での驚き

日本語上手すぎと言えば、昨年の大阪万博でマレーシア出身の大学の同級生と5年ぶりに再会したときの驚き!彼女が卒業以来久しぶりに日本に來る。しかも万博で働くとのこと。数ヶ月滞在するよと連絡あり。結局予定が合わなくて帰国する空想での見送りだけの再会に。でも、その1時間であれよあれよと驚きの連続。彼女は在学中はどちらから大人っぽくて口数もそんなに多くなかった。そんなイメージでいたけれど、全然違つた!卒業後の話、母国での社会人生活の話、大阪での家探しの話、万博での仕事の話、今後やってみたいことの話、私が知らない日本の話、等々、とても時間が足りない。めっちゃアグレッシブアウター。素敵だなあと思つた。のと同じように、私は5年前から更新できて、もつとパワーを周りに振り

撒ける人間になろう。と奮い立つたのでした。

新幹線・八百万の神

関西空港へ行くためにすこく久しぶりに東海道新幹線に乗った。これを羽切に翌月、翌々月も東海道新幹線が出かけた。丁度この頃は会社の上司と「今後どうしたいのか。」を毎週やり取りして、自分の考えや過去を振り返ったり「言葉にできてないことに悶々としたり」「悩みすぎて足が止まってしまう時は、未だやつたことのない越境体験をせよ」というマイルールが発動していた頃だった。そんなときに乗った新幹線。私は2人席の窓側に座っていて、しばらく走つた後の駅からスーツを着た男性が隣の席に乗ってきた。その方は寝る訳でもなくスマホを見る訳でもなく、机の上にアイモンドチョコと缶珈琲を置いて、本を読み始めた。私はその光景に結構驚いた。一人乗っている人はスマホを見るか寝る人がほとんどだったから。なので、しばらく窓の反射越しに勝手に観察して(スミマセン本を読み終わったのを見て、声をかけたんです。「あの…すみません。つかぬ事を伺います。今読まれていらっしゃる本の名前を教えてくださいませんか。本の名前を教えてくださいませんか。私今人生に悩んでるんです」って笑。その男性は「瞬目を見開いて、でも優しい声で話をしてくれました。本のタイトルは、ちろん、『悩んじゃあいいねえよ』と。その方はちやうど定年で退職されたばかりだったよ



大学の後輩がテイラーの巨匠とタグを組み仕立屋を始めました。祖母が昔作ってくれた洋服のお直しを♪ジャケットは希望を伝えて着丈を短くし、袖を狭める提案もいただき併せてお願いしました。この冬はルンルンです♪
東京日本橋小伝馬町駅近く『THE LOA』によかったら。

90回生
大崎早恵

紫色のボンボンのようなお花がお気に入りアリウム?だったかな



娘ちゃんがホワイトデーで作ったお菓子と張った頑張り



出版リーダー



田島征三 (34回生)

どんぐりと山猫
三起商行 2026. 1



田島征彦 (34回生)

とんとんみーときじむな—
童心社 2025. 4



尾池和夫 (34回生)

新氷室歳時記
青磁社 2025. 10



野田正彰 (37回生)

過ぎし日の映え
続 社会と精神のゆらぎから
鹿砦社 2025. 12
流行精神病の時代
鹿砦社 2025. 8



塩田潮 (40回生)

戦後80年の取材証言:
私が聞いた「歴史的瞬間」
東洋経済新報社 2025. 7



黒鉄ヒロシ (41回生)

名馬万考:
歴史を駆け抜けた駿馬たち
笠間書院 2025. 12



西田博 (47回生)

北京の夢
Kindle版 2025. 10



阿部知暁 (51回生)

ごりらの ばあちゃん
(ちいさなかがくのとも
2025年9月号)
福音館書店 2025. 8



須藤靖 (52回生)

宇宙する人生
東京大学最終講義
日本評論社 2026. 1

新連載『向陽の空のムコウ』
本誌P20にて



門脇護 (53回生) / 門田隆将

日本を甦らせる「高市早苗」の敵
ワック 2026. 1
日本を強くする10の原理
ビジネス社 2026. 2



森岡浩 (55回生)

47都道府県・美術の偉人百科
丸善出版 2025. 8



井上大志 (84回生)

大学技術移転サーベイ
大学知的財産年報2024年度版
大学技術移転協議会 2025. 6